

厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）

小児がん拠点病院等の連携による移行期を含めた小児がん医療提供体制整備に関する研究
分担研究報告書

「小児がん拠点病院による小児がん医療提供体制の検討」

研究分担者 後藤 裕明 神奈川県立こども医療センター血液・腫瘍科 部長

研究要旨

神奈川県立こども医療センターにおける小児がん拠点病院としての整備状況を、診療面（集学的治療の提供、小児がん早期相試験の実施）、長期フォローアップ、地域連携、相談支援、緩和ケア、AYA 世代がん患者への取り組み、医療従事者研修に分けて考察した。診療面、相談支援部門については、拠点病院として期待される役割を果たしていると考えられたが、AYA 世代がん患者への取り組みや長期フォローアップ体制については課題が残り、今後さらなる取り組みが必要である。

A. 研究目的

2012年に小児がん拠点病院制度が制定され、神奈川県立こども医療センターは関東甲信越地区の拠点病院として、小児がん医療提供体制の充実に努めてきた。本研究の目的は、小児がん拠点病院指定要件に示された拠点病院としての役割、さらには、小児がん拠点病院連携協議会や地区の小児がん医療提供体制協議会において提言された拠点病院の役割を参照し、神奈川県立こども医療センターの地域における小児がん拠点病院としての取り組みを評価することである。

B. 研究方法

神奈川県立こども医療センターは、小児がん診療に関わる複数の部門・部署を有機的に統括し、診療への取り組みを効果的に推進することを目的として、2015年に小児がんセンターを設置した。平成30年度における小児がんセンターの活動実績を集学的治療の提供、小児がん早期相試験の実施、長期フォローアップ、地域連携、患者・家族に対する相談支援、緩和ケア、AYA 世代患者への支援、医療従事者に対する教育と研修、の項目ごとに評価した。

C. 研究結果

集学的治療の提供

神奈川県立こども医療センターにおける平成 30 年度における新規診断および治療開始小児がん患者数は、80 件であった。初期治療を他の施設で行われ、再発後に当センターに転院となった症例も多く、集学的治療を要する固形がん症例、難治例が集約されている傾向がみられた。固形がんを対象とした Tumor Board は 68 件、開催された。

小児がん栄養プロジェクトチームによる、すべての入院患者を対象にした治療中の栄養管理、口腔ケアに関する検討会、リハビリテーション科と血液・腫瘍科による合同カンファランスはいずれも毎月開催し、長期入院を要する小児がん患者に対する多職種チームによる介入を引き続き行った。栄養と口腔ケアを主題とした患者・家族との座談会である栄養サロンは年に 3 回開催した。

小児がん早期相試験の実施

神奈川県立こども医療センター治験管理室の協力のもと、小児がんを対象とした企業治験（5 件）、医師主導治験（1 件）に参加し、他院からの紹介患者も受けながら、症例組み入れに協力した。

長期フォローアップ体制の整備

平成 29 年から長期フォローアップ外来を開設した。この外来は、ガイドラインに基づいた患者毎の適切な長期フォローアップ計画の作成、および患者教育と自立支援を主な目的として、通常の外来とは独立して行われている。平成 30 年 1～12 月の間に 17 名の小

児がん経験者が長期フォローアップ外来を受診し、診断経緯、治療の内容、今後の健康管理について医療者からの説明を受けた。

地域連携

地域における小児がん診療施設との連携を充実させるために、神奈川県小児がん診療体制連携協議会、横浜市小児がん診療連携病院協議会を開催し、小児がん診療に関する情報交換を行った。

相談支援

小児がん相談支援室が担当した小児がん患者および家族への相談件数は、平成 30 年は 276 件であった。このうち院外患者からの相談が 36 件であった。小児がん相談支援室ではホームページを開設しており

（<http://kcmc.jp/shounigansoudan/>）、このホームページを介した相談も 16 件あった。

緩和ケア

血液・腫瘍科の診療カンファランスに緩和ケアチーム員が参加し、原則としてすべての小児がん患者に対し緩和ケアチームの介入が行われた。

AYA 世代がん患者への取り組み

Teen ' s Room の活用、また思春期世代患者を対象とした映画鑑賞会を開催し、こども専門施設の中で少数派である思春期世代患者が、集い語り合うことができる場を提供した。長期入院を要する高校生への学習支援、高校生の単位取得に関する検討を、横浜市および神奈川県の教育委員会と行った。

医療従事者研修

小児がん医療従事者の研修を目的として、小児がんセンターとして下記の研修会等を企画、開催した。

- ・小児がんセミナー（院内を中心とした診療従事者、2回）
- ・小児緩和セミナー（院内外の診療従事者、5回）
- ・小児がん看護研修（関東甲信越ブロック小児がん診療施設、2回）
- ・小児がん相談支援セミナー（小児がん支援者、1回）

その他

小児がん経験者とその家族、または一般市民を対象として、下記の研修会を開催した。

- ・血液・腫瘍科家族教室（院内患者、家族、2回）
- ・小児がん栄養サロン（院内患者、家族、3回）
- ・小児がん経験者の会（院内外の小児がん経験者、1回）
- ・小児がん家族サロン（院内の小児がん患者家族、4回）
- ・小児がん市民公開講座（一般市民、1回）
- ・小児がん健康教育プログラム（院内の小児がん患者、その家族、2回）
- ・小児がん啓発イベント（一般市民、1回）
- ・小児がんセンターだよりの医療機関への配布（3回）

D. 考察

2012年以降、難治例、集学的治療を要する症例が集積し、早期相試験参加のための転院を受け入れるなど、診療面において地域の小児がん診療施設

との役割分担、診療連携はすすんでいる。小児がん相談支援室を開設し、他院で治療中の患者・家族からも相談を受けるなど、小児がん拠点病院として期待される相談支援機能が整備された。一方で特に、AYA世代がん患者に対する診療・支援については課題が残る。少数の高校生新規患者の受け入れを行ったが、小児専門病院としての制約から、地域のAYA世代がん全般に対して十分な関与を行ったとは言い難い。今後は地域の成人診療科と協働・連携を目に見える形ですすめ、地域としてのAYA世代がん患者診療体制を整備する必要がある。長期フォローアップ外来はすでに治療終了後長期が経過した症例のみに行われたが、今後は、診断後の早期から長期フォローアップの観点を持った診療が行われるべきという事実が、医療者にも患者・家族にも認識されるような工夫が必要である。

E. 結論

小児がん拠点病院として、診療、相談支援の点で機能整備がすすめられた。AYA世代がん患者の診療、長期フォローアップの体制については課題が残り、引き続き改善が求められる。

F.健康危険情報

特になし。

G.研究発表

特になし。

1. 論文発表

特になし。

2. 学会発表

特になし。

H. 知的財産権の出願・登録状況(予定を含む)

1. 特許取得

該当事項なし。

2. 実用新案登録

該当事項なし。

3. その他

該当事項なし。